

文責 田島幸人・小深田結

写真撮影 別宮一輝

【プログラム概要】

- 期間：2025（令和 7）年 8 月 2 日（土）～8 月 19 日（火）計 18 日間
- 場所：英国 オックスフォード・ケンブリッジ
- 参加者：高校生 66 名（うち Tazaki 財団 第 9 期語学研修生 13 名、第 8 期留学奨学生 4 名）、中学生 4 名
サポーター：7 名

【日程】

日付（8 月）	活動内容
2 日（土）	羽田空港から JAL 便にて出発。 ロンドン・ヒースロー空港に到着。その後 ibis ホテルに宿泊。
3 日（日）	オックスフォードへバスで移動。Jesus College と Balliol College に分かれて宿泊。
4 日（月）	授業 第 1 セッション①
5 日（火）	授業 第 1 セッション② チュートリアル開始 講演①（大学生向け）
6 日（水）	授業 第 1 セッション③ 講演②（高校生向け）
7 日（木）	授業 第 2 セッション① 講演③（高校生向け）
8 日（金）	授業 第 2 セッション② 講演④（大学生向け）
9 日（土）	コッツウォルズへ遠足
10 日（日）	自由行動：グループに分かれてロンドン観光やオックスフォード市内散策
11 日（月）	授業 第 2 セッション③ Balliol College にてフォーマルディナー
12 日（火）	ケンブリッジへバスで移動。Tazaki 財団生は Downing College、その他の生徒は King's College に分かれて宿泊。
13 日（水）	授業 第 3 セッション①
14 日（木）	授業 第 3 セッション②

	一部の生徒はロンドンの裁判所を訪問。 Downing College 宿泊者、フォーマルディナー
15 日（金）	授業 第 3 セッション③ King's College 宿泊者、フォーマルディナー
16 日（土）	自由行動：グループに分かれてロンドン観光やケンブリッジ市内散策
17 日（日）	ノーフォークへ遠足
18 日（月）	ケンブリッジ市内自由行動 バスでヒースロー空港へ移動し、出国。
19 日（火）	羽田空港に到着。

【授業】

今年からは高校生以下と大学生以上の授業が完全に分けられて実施されました。さらに中学生 4 名も参加し、それまでの高校生・大学生混合授業とは異なり、それぞれのレベルにあった授業が行われました。

TOPS の授業ではオックスフォード大学やケンブリッジ大学の教員から、それぞれの専門分野を英語で学びました。今年は西洋古典や法律に加えて、物理、化学、生物、コンピューターサイエンスなどの理系科目、高校生向けに A レベル英語、歴史、数学、発展数学と中学生向けに GCSE 数学が開講され、幅広い分野から 4 教科の授業を選択して受講しました。

授業は 3 時間×3 日間の 9 時間を 1 セッションとして、合計 3 セッション行われました。元々興味があった教科を選択した人も、全く新しい教科を選択した人も、英語で授業を受け、議論し、濃密な時間を過ごしました。

古典

- Latin Literature Prose
- Tragedy
- Mythology
- Lyric
- Homer
- Homer and Vergil
- Anthropology and Classics

法律

- Contract
- English Legal System
- Tort

その他の科目

- Maths
- Further Maths

- Maths (GCSE)
- A Level English
- A Level History
- Computer Science
- Advanced Computer Science
- Biology
- Physics
- Art and History
- Translation



Gunther 先生による
Tragedy の授業（第 1
セッション）

これらの授業とは別に先生 1 人に対して生徒 1 から 3 人の少人数で行うチュートリアルが行われました。



Domenico Giordani 先生
とのチュートリアルの様
子

【詳細日程】

出国～現地到着

8月2日は早朝6時45分に羽田空港に集合し、出国しました。多くの保護者の方々にもお見送りいただき、サポーターにチェックインした生徒は各自で保安検査を通過し、飛行機に搭乗しました。14時間という長いフライトでしたが、全員無事にヒースロー空港に到着しました。人数が多いため、荷物を受け取った後は3つのグループに分かれて行動しましたが、重い荷物を抱えながらもスムーズにホテル（Ibis ホテル、ヒースロー）まで移動することができました。翌日はホテルにて朝食後、バスでオックスフォードに向かいました。Tazaki 財団生・女子と一部の男子は Balliol College に、残りの男子は Jesus College に宿泊しました。予定よりも早めに到着したため、宿泊先へのチェックイン後は各々自由に散策したりくつろいだりして、オックスフォードでの初日を楽しみました。Balliol College の寮は全室トイレ・シャワーがついており、快適に過ごすことができました。

授業のある日についての1日の流れは以下の通りでした。（括弧（）内はケンブリッジ滞在時の時間）

	起床
8:00-	各カレッジにて朝食
9:30-13:00 (9:00-12:15)	授業（午前）
	昼休み
14:00-17:30 (13:15-16:30)	授業（午後）
	講演・自由時間等
18:00 頃-	各カレッジにて夕食
	就寝



青空に映える Balliol College の建物。

8月4日～8月6日 第1セッション

TOPS 最初のセッションでした。まだ到着からまもなく、場所にも授業にも慣れていないことから、初回では議論も活発ではなく、静かな様子でした。特に古典など日本であまり触れていない分野では新しい用語に苦戦している生徒もいました。しかし、2日目の授業以降では発言や議論も活発になり、授業に楽しみながら積極的に参加する様子が印象的でした。

2日目以降、チュートリアルも開始されました。オックスフォード大学やケンブリッジ大学の授業形式を模して、1～2人の生徒に対して1人の先生の少人数で、主に授業内容について英語で議論しました。初めは緊張している生徒も多く見受けられましたが、授業で学んだことを中心に徹底的に話し合うことで理解が深まったと手応えを感じる生徒が多くいました。

また授業 2日目以降、順次講演会も催されました。初日の8月5日は大学生向けに Sandy Steel 先生が法哲学 (Jurisprudence) の分野から、「環境問題は誰の責任になるのか？」という議論について講演なさいました。中学生・高校生は任意での参加でしたが、多くの学生が興味を持って参加し、大学生が多く参加している中でも積極的に質問をする様子が見受けられました。参加した高校生からは講演での英語や内容は難しかったものの、大学生たちのレベルの高さに驚き、もっと勉強せねばという良い刺激になったとの声も聞こえました。

2回目の講演は高校生向けで、Adam Roberts 先生から「なぜこれほど多くの戦争が起きるのか」という内容について伺いました。昨今の世界各地での戦争に関連した内容であったこともあり、多くの生徒が耳を傾けていました。



Adam Roberts 先生の講演に
熱心に耳を傾ける学生たち

8月7日～8月11日 第2セッション

前日までの第1セッションからクラスメートや先生が変わり、新しい環境での再スタートとなりました。英語での授業や授業形態に慣れてきた人も多くなりました。次第に生徒同士打ち解けてきた時期でもあり、授業の休み時間や夕食後に集まって勉強したり話したりする生徒も多く、寮生活を満喫していました。



Jesus College のベンチで
昼食を取る生徒たち。
授業の合間のこうした
時間も仲間との大切な
ひとときです。

第2セッションの講演会は2回行われました。1回目の7日は高田医師による、「医学をめぐる研究、教育、臨床の日英比較」についての講演でした。翌日 8 日は大学生向けに Ernest Metzger 先生からローマ法について伺いました。

また、第2セッション最終日には Balliol College にてフォーマルディナーが催されました。中学生・高校生全員に加え、Adam Roberts 先生を含め、TOPS でお世話になった先生方もご出席され、それぞれの先生方がいらっしゃるテーブルを囲うように生徒たちが座ることでより多くの生徒たちが先生方と会話をすることができました。少しフォーマルな服装で厳かな雰囲気の中、コース料理を共に食べながら先生方や他学生たちと交流を深める、大変貴重な経験になったのではないのでしょうか。



Balliol College ダイニングホール
でのフォーマルディナーの様
子。厳粛な雰囲気の中で美味し
いコース料理をいただきました。

8月13日～8月15日 第3セッション

12日朝にオックスフォードを発ち、バスでケンブリッジに向かいました。化学を選択した生徒たちは到着後すぐに授業開始となりましたが、その他の生徒は St. John's College にて入学試験制度についての講演を受けました。

化学以外の授業は 13 日から始まりました。ケンブリッジへと場所が変わり、授業の時間等も変わったことで混乱を来してしまうことも多々ありましたが、美術館・博物館巡り等、校外学習が多かったこともあり、新たな刺激になったことと思います。特に、English Legal System の受講者は 14 日にロンドンへ行き、法律事務所を見学後、最高裁判所内を巡りました。その後はテンプル教会でも貴重な話を伺うことができました。



法律事務所で説明を受ける生徒たち。



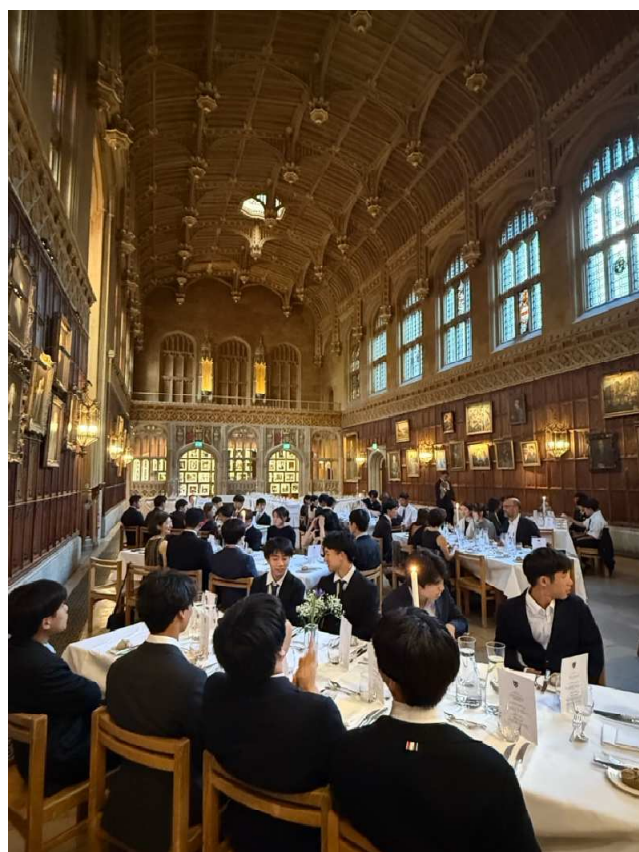
English Legal System の先生からの説明を聞いている様子。

その後 14 日夜には Downing College、15 日夜には King's College でフォーマルディナーが催されました。Downing College の宿泊者は数も少ないため、全員で一つの長テーブルを囲みながら参加された先生方と会話し、ゆっくりとした時間を過ごすことができました。



Downing College でのフォーマルディナーの様子。人数も少ないからか、リラックスした表情で話す生徒たち。

一方 King's College でのフォーマルディナーはダイニングホールでの食事でした。第 3 セッションで教えてくださった先生方も多数出席され、豪華な雰囲気の中、食事をいただきました。ディナーの後は一人一人に修了証が授与されました。



King's College でのフォーマルディナーの様子。



ディナーの後の修了証授与式。Robin 先生から一人一人に修了証が授与されました。

遠足

コッツウォルズ（8月9日）

中学生、高校生は朝からバス 2 台に分乗し、コッツウォルズ地方に向かいました。初め Sibford という、クエーカー教徒が 350 年来住んでいる伝統的な村を訪れました。そこからはオックスフォード大学 Balliol College の教授である Oswyn Murray 先生に案内いただき、Sibford Quaker Meeting に行きました。その集会所ではクエーカー教徒の方から歴史や彼らの考え方、日本との関係などについて説明を受けました。



Sibford Quaker Meeting でクエーカー教について
の話を聞きました。

その後パブにて昼食を食べました。人数の割にサポーターの数が少なかったことから配膳に時間がかかってしまいましたが、伝統的なパブ食を堪能することができました。



パブでの食事
の様子。



食事は写真のように
ビュッフェ形式でし
た。

最後に Broughton Castle を訪問しました。700 年以上の長い歴史を有するマナーハウスで、庭園も屋敷の中も素晴らしいものでした。ガイドの方々から詳しい話を聞いたり、東洋風の家具や調度品をじっくり観察したり、屋上から庭園を眺めたりしました。



Broughton Castle の庭園の様子



漆喰の天井が美しいマナーハウスの大広間

邸宅を見た後は併設されているカフェでクリームティーをいただきました。クロテッドクリームとジャムをたっぷりつけていただくイギリススタイルの大きいスコーンは優雅な雰囲気のマナーハウスとよく合い、のどかな時間を過ごすことができました。



クロテッドクリームとジャムたっぷりのスコーンと紅茶



庭園で食べるクリームティーは格別

ノーフォーク（8月17日）

終日の予定としては帰国前最後のイベントでした。朝から2台のバスに分乗してケンブリッジから2時間ほどのノーフォークへ向かいました。途中渋滞に見舞われたことにより、到着が遅れてしまいましたが、到着後は広大な敷地の中にある **Holkham Hall** を見学しました。ここではヴィクトリア王女やアン女王が滞在したとされる部屋、調度品の数々を目の当たりにしました。



Holkham Hall 内の部屋。Broughton Castle とは異なる豪華さでした。



マナーハウスの入り口。

マナーハウスを見学した後は併設されているカフェで昼食をとり、近くの海岸に移動して自由時間を過ごしました。風が強くて寒かったものの、砂の海岸であったため学生たちも海を歩きながら楽しんでいる様子でした。



ノーフォークの海岸にて。

自由行動

ロンドン・オックスフォード（8月10日）

最初の自由行動日で、それぞれ行きたいところに応じてグループを作り、多くの人がロンドンに行きました。ロンドン観光をしたい人たちは基本的には以下のコースから希望を取り、それぞれにサポーターが随伴して行動しました。

- 大英博物館集中チーム
- 大英博物館→コベントガーデン→エリザベスタワー（通称ビッグベン）周遊チーム
- ミュージカル（ウィキッド）鑑賞チーム



ロンドンらしからぬ晴れ空のもと、イギリス国会議事堂とビッグベンを背景に記念撮影する学生たち

ロンドン・ブライトン・ケンブリッジ（8月16日）

2回目の自由行動も1回目と基本的には同じでしたが、今回はサポーター同伴のコースには以下の4コースが設定されました。

- 大英博物館→コベントガーデン→エリザベスタワー周遊チーム（ロンドン）
- バッキンガム宮殿→ナショナルギャラリー観光チーム（ロンドン）
- ミュージカル（レミゼラブル）鑑賞チーム（ロンドン）
- サッカー（Brighton 対 Fulham）観戦チーム（ブライトン）

帰国

8月18日に全日程を終えて帰途につきました。飛行機はヒースロー空港から午後7時20分発であったため、午前中はチェックアウトを済ませてから自由にケンブリッジ市内を観光し、最終的に午後2時のバスにてヒースロー空港へ向かいました。数名の生徒が異なる便で帰国するため、最後にはすっかり打ち解けた様子で別れを惜しむ姿も見受けられました。翌日19日、JAL便に搭乗した全員が帰国し、本プログラムを終えました。



帰国前最後の記念撮影にて。
この後ヒースロー空港から出
国しました。



Balliol College でのフォーマルディナーにて。

語学研修生参加者（有志）からの報告

Tazaki 財団事務局

E さん（私立女子学院高等学校）

私は当初高2の夏休みの3週間を TOPS に費やすことに抵抗があったが、今では行ったことに全く悔いはない。オールイングリッシュで授業を受ける経験が今までほとんどなかった私にとって、TOPS は私自身の英語力がどれほど通用するのかを試し、英語が得意な他校の生徒たちから刺激を受け、そして英語学習のモチベーションに繋がった良い機会だった。

寮生活では、夜の自由時間に友人の部屋や共用キッチンで集まって、授業の予習・復習をしたり、雑談をしたり楽しい時間を過ごした。時には話題が今後や将来といった現実的な話になり、同期の語学研修生の志の高さに圧倒されつつも、自分自身の将来について深く考える貴重な時間となった。

平日の自由時間や自由日はとても自由度が高かった。自由時間には友人と（時には1人で）オックスフォードやケンブリッジの市内を巡ったり、パンティングをしたりして、涼しいイギリスの空気を満喫することができた。また、自由日には自然史博物館やケンジントン宮殿周辺を散策したり、ミュージカルを鑑賞したりした。

食事については、期待以上に美味しかった。特に、フォーマルディナーでは美味しい食事を前に会話が弾み、そして学校の先輩ともお会いすることができ、忘れられない経験となった。

TOPS は少人数授業やチュートリアルなどのシステムを体験するのみならず、日本とは違う環境で他校の生徒と交流することで、自分の将来や進路について深く考えるきっかけを与えてくれたサマースクールだった。TOPS で過ごした3週間を憶えて、再びいつかイギリスに戻れるよう精進したいと思う。

S さん（都立武蔵高等学校）

TOPS に参加させていただきました語学研修生の SY です。

私は今回がイギリスに留学するのは初めての経験だったのですが、TOPS を通して語学研修生のみんなや他の人たちなど TOPS がなければ会うことができなかった素敵な方々と知り合い、寮生活を通して交流することができました。また、オックスフォード大学とケンブリッジ大学の授業はどれも日本では体験できない、知的好奇心が刺激されるような題材ばかりでとても楽しかったです。講演会なども興味深い内容ばかりで次は何の講演なのかとワクワクさせられました。これらの体験の中で自分の学びたい学問と出会えたのもとても大きな収穫でした。TOPS で得た学びを自分の将来に絶対に生かしていきます。乞うご期待。

S さん（国立東京科学大学附属科学技術高等学校）

Tops では本当に貴重な体験がたくさんできます。

私自身英語の力が他の子と比べあまり高くないため、正直 all English の授業中で理解に苦しむところもありました。

しかし、友達と前日の夜に部屋に集まって次の日の授業の予習をしたり、授業中に友達と相談や協力したりしあうことで理解でき、先生ともとても仲良くなりとても楽しい授業でした。

授業がないコマの時は、自分の好きなことができます。部屋に戻って宿題をしてる友達もいましたが、私は街の中を散策して買い物をしたり美味しいスイーツを食べたり enjoy していました。

また、自由行動日は、ロンドンに行く友達がほとんどで、皆の行きたい所を組み合わせ、サポーターの方が複数のコースを作ってくださり、どのコースに参加するかを選択しました。私は 1 回目のロンドンの日は、Wicked のミュージカルなどに行き、2 回目はコベントガーデンやキングスクロス駅(Harry Potter)などに行きました。希望をととても聞いてくださり、それぞれにとってとても思い出に残る旅になること間違いなしです。

その他にもフォーマルディナーを行ったり、エクスカーションで海岸や貴族の住んでいる家に行ったりととても楽しいことばかりでした。

特に私は、食事がとても印象に残っており、朝も夜もとっても Volume 満点で、自分で Choice するのですが毎回取りすぎていました。お腹はち切れるぐらいまで日本では味わえないような食をイギリスで楽しめるのも貴重な思い出です。

最後に、私は今回参加して本当に良かったと思っています。友達、先生、サポーターの方との絆や、貴重な体験や思い出が沢山できるだけでなく、将来への大きな一歩につながるはずです。

Y さん（私立駒場東邦高等学校）：

Our lives are not defined by any one action. Our lives are the sum of our choices.

我々の人生はひとつの行動で決まるのではない。人生は全ての選択の結果だ。

—映画『ミッション：インポッシブル/ファイナル・レコニング』—

このセリフに出会ったのはこの映画の上映初日のことで、この時には既に最終面接の合否が伝えられていました。残念ながら Tazaki 財団の奨学生には選ばれませんでした。そんな私でもここに来るまでに数々の選択を積み上げてきました。Tazaki 財団のホームページを初めて開いた時。両親にイギリス留学を目指すと言った時。実際に志願理由を書こうと Word を開いた時。担任の先生に打ち明けた時。そして、Tazaki 財団から送られてきた最終面接の結果を伝えるメールを開いた時。ここには書き上げきれない程多くの選択の末に今の私がいま

す。もしここに Tazaki 財団の選考に応募すらしていない自分がいたとしたら、今の自分よりも“人間力”の足りない自分であると断言できます。それほどまでに今私が見ている景色は過去の自分では想像も出来なかったほど素晴らしいものです。

さて、今私の報告書を読まれている方の中には、最終面接で落ちてしまった語学研修生がいると思います。そんな方々にたった一つ、伝えたいことがあります。それは、迷わず TOPS に参加すべきであるということです。TOPS で得られるものは、単に英語で大学の授業を受けられるということだったり、イギリスの街並みや文化を知れるということに留まりません。TOPS で私が得たのは、全幅の信頼を置ける誇らしい友人たち、深夜のシリアスな雑談を通じた深い自己理解、そして“学ぶ”という行為そのものへの欲求でした。

まず一つ目に友人に関してですが、読者の方も今まで(もしくは今後)ブリティッシュカウンシルで奨学生も含め他の語学研修生と親睦を深めたはずです。そんな仲間たちと異国の地でおおよそ2週間に渡り、毎日同じ食堂で会話を楽しみながら食事をし、時には取る授業が被り扱った題材に関する議論が盛り上がったり、夕食後に一つの部屋に集まってある日には勉強を、ある日にはトランプを、ある日には真面目に将来のことを話したり。そんな生活が続けるうちに全幅の信頼を置けるような友人ができることは想像に難くないと思います。そんな友人ができるというのは人生を通じても滅多に無いことではないでしょうか。そんな友人ができたことを心の底から誇らしく思うとともに、この貴重な経験を是非語学研修生の皆さんにも経験して欲しいと強く思います。

二つ目に、深い自己理解についてです。少し仰々しいですが、私は人生で初めてと言っているほど自分自身のことを深く知れたように思います。それをもたらしてくれたのは、友人たちとの深夜に開催したシリアスな雑談でした。一つのテーマに固執せず、だらだらとお互いに将来のことや、自分の性格のこと、哲学のようなことまで話しました。「燈台下暗し」という言葉があるように、意外と人は足元のことをよく見ていなかったりするものです。信頼に足る友人と腹を割って色々なことについて話すという行為は、今まで自分が気づかなかったような、思いもよらなかったような自分の内面に気づかせてくれます。“選ばれない”という経験を味わったあなたにこそ、このような会話を通じた深い自己分析と自己理解を強く強くお勧めします。

そして最後に、“学ぶ”ということへの欲求についてですが、私を含め日本の高校教育を受けてきた人はあまり学習という行為に対して意欲的に取り組む人は少ないのではないのでしょうか。普段学校での勉強に意欲的に取り組んでいるとはあまり言えない私ですが、イギリスにいる間、大学での授業を一度も受動的に受けることはありませんでした。個人的な見解ですが「なぜ」にこだわった先生独自のユーモア溢れる授業が“学び”への欲求を高めてくれたのではないかなと考えています。童心に帰るように、学びの源泉である純粋な好奇心を取り戻させてくれるというのも、TOPS の魅力の一つです。

改めて伝えたいのは、語学研修生の皆さんに **TOPS** に参加して欲しいということです。もちろん人それぞれ **TOPS** を通じて得るものは異なると思いますが、どれも価値あるものとなるはずです。冒頭で述べましたが、私にとっても、今後の皆さんにとっても、**TOPS** に参加するということは長い目で見れば人生を決定するほどの選択ではないでしょう。けれどその選択は無数に積み上げてきた選択の中で一際輝きを放つ選択になるはずです。

自分が想定していたよりも長く、そして少々抒情的な報告書になってしまいましたが、最後にこの言葉をもって締めさせていただきます。

Loser? Fine by me!